

令和3年度（第43回）

# 少年の主張石川県大会

発表記録集

伝えよう！21世紀を生きる君たちの熱いメッセージを



健民運動

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部  
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

## はじめに

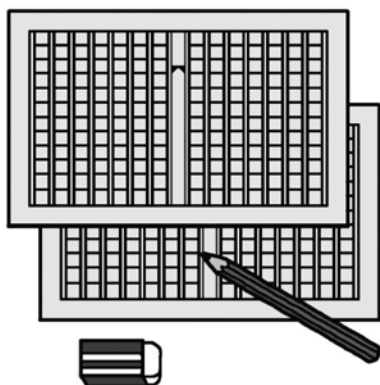
昭和五十四年国際児童年を記念してはじめられた少年の主張石川県大会も、たくさんの方々を支えられ、今年で四十三回目を迎えることができました。

この大会は、中学生が、日常生活の中での体験や考えを自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらうことを目的として開催しております。

本大会は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止するため、主張発表動画の審査による開催となりましたが、加賀地区、金沢市地区、石川中央地区、能登地区の四地区から選ばれた十六名の中学生が、それぞれの体験から真剣に考えたことを力強く発表し、視聴した皆様に大きな感動を与えました。

この記録集は、その十六名の主張を取りまとめたものです。一人でも多くの方々に読んでいただき、中学生が日ごろどのように考え生きようとしているのかをご理解いただき、今後の子ども・若者活動推進の一助としてご利用いただければ幸いです。終わりに、地区大会をはじめ、この大会のためにご尽力いただきました多数の皆様にお礼を申し上げます。

石川県健民運動推進本部



も く じ

◎はじめに

◎大会発表作品

最優秀賞

コロナ禍で感じた「学ぶことの大切さ」

金沢大学附属中学校 三年 土山 桃愛……………3

優秀賞

継続が持つ大きな力

金沢市立医王山中学校 三年 丸山 里紗……………4

男でも、女でも

中能登町立中能登中学校 二年 森正 璃音……………5

奨励賞

私たちにとって「働く」とは？

小松市立松陽中学校 三年 橋 紀仁……………6

本当の勝者とは

小松市立松東みどり学園 九年 城下 心温……………7

認めること

小松市立御幸中学校 三年 黒宮 美咲……………8

片山津の未来のために

加賀市立片山津中学校 三年 岡田 亘誠……………9

美しいミャンマーと私

金沢市立芝原中学校 二年 荒谷 光……………10

笑顔の力

金沢市立城南中学校 三年 高嶋 桜……………11

これからの情報社会に向けて

白山市立北辰中学校 三年 江川 友彩……………12

未来を生き抜く力

白山市立北辰中学校 三年 山下 果歩……………13

障がいのある人々

野々市市立野々市中学校 三年 満田 弥音……………14

愛すべき「普通」

内灘町立内灘中学校 三年 百万 花梨……………15

好きなこと

七尾市立七尾中学校 三年 長尾 優愛……………16

正しい情報が行き渡る世の中に

輪島市立東陽中学校 二年 中村 紗綾……………17

言葉と責任

七尾市立能登香島中学校 三年 林 瑞樹……………18

(優秀賞、奨励賞は地区大会順に掲載)

◎審査員講評……………19

石川県教育委員会事務局学校指導課 課参事 宮坂 巖

◎少年の主張石川県大会概要……………20

◎石川県大会審査基準……………21

◎地区大会概要……………22

◎第43回少年の主張全国大会

「わたしの主張2021」 内閣総理大臣賞受賞作品……………26



「放射能がうつる！ 広島に帰れ！」

これは私の母が私と同じ中学三年生の時に同級生から言われた言葉です。当時、母は広島県から富山県に転校してきたばかりでした。広島に住んでいただけで心ない言葉を言われ、とても傷ついたそうです。しかし、新しい学校生活に慣れてくると、同級生たちは原爆について正しく理解していないことに気が付きました。その時、母はこう感じました。「知らないということとは、とても怖いことだ」と。

大人になった母は石川県のテレビ局に就職し、石川にもたくさんの被爆者がいることを知りました。

戦後七十年が過ぎ、被爆者たちが高齢化していくのを見て、被爆体験を後世に伝えようと被爆証言を集めたDVDを作りました。

撮影をする時、私も連れて行ってもらいました。直接被爆者に会って聞いた証言はテレビや本よりもずっと壮絶でした。

当時、十五歳の少年兵だった松原隆さんは原爆が落とされたばかりの広島でケガをした人々の救援活動をしました。

「水を飲ませたら死んでしまう」と聞いていたため、大やけどをした男性が濡れた手ぬぐいをチューチュー吸っているのを見て、手ぬぐいを取り上げました。

しかし翌朝、その男性が死んでいるのを見て「何で水を飲ませてやらなかったんだ」とひどく後悔したそうです。「今でも手ぬぐいを取り上げた時の男性の恨めしそうな目が忘れられない」と泣いています。

戦争は遠い昔の話だと思っていた私は、今も苦しみ続けている松原さんを見て、涙が止まりませんでした。

さらにショックだったのが、松原さんは八十歳を過ぎるまで自分が被爆者であることを隠し続けていたということです。

それは、全国的に見れば戦争による被害が少なかった石川県では、原爆についての理解が乏しく、被爆者は偏見の目で見られたり、差別を受けたりしたからです。

今、世界は新型コロナウイルス感染症と闘っています。未知のウイルスに対する不安と恐怖でネットにはデマが飛び交い、アジア人への差別や暴力事件も起きています。

周りでも「感染者が出た学校の子だから、近付きたくない」、「クラスターが出たのはどこ？」という声を聞く度、私は胸が痛みます。差別と偏見におびえ続けた松原さんの苦しみが少しだけわかったような気がしました。

人は誰でも未知なる物に遭遇すると、不安や恐怖を感じ、拒絶したくなります。それは仕方がないことかもしれませんが、人々の間に差別や偏見が広がると、分断や対立が起きてしまいます。

でも、勉強をして幅広い知識を身につければ不安や恐怖は和らぎ、暮らしやすい社会をつくるのが出来るのではないのでしょうか。

私はこのコロナ禍で『学ぶことの大切さ』を強く感じました。

私の将来の夢は、外交官になることです。実際に現地を訪れて学んださまざまな国の文化や考えを日本人に伝えたいです。そして、歴史と文化が息づく石川県で育った者として、日本だけでなく石川県の素晴らしさを広く世界へ発信していきたいと考えています。差別も、偏見もない、平和な世界を実現するために。





「継続」この言葉は私がおかしく挑戦する時、一番大事にしようと思っ  
ている言葉です。

私の祖父は、大阪のあいりん地区という場所で住所不定の方や仕事  
がない方など生活に困っている方々に、カレーライスやお菓子、お茶  
を提供する炊き出しを行っています。

私は、祖父のしている炊き出しについて深く考えたこともなく、逆  
に悪い印象を持っていました。

炊き出しにくるホームレスの方々に対して、「きたない」「感情がな  
い」「怖い」などの偏見を持ち、ボランティアなんていやな気持ちに  
なるだけだと。そう思っていました。

そんな私が祖父母のすすめで炊き出しに参加し、継続の大事さを実  
感することになったのです。

炊き出し開始の準備が終わり、私の役目は来てくださる方にお菓子  
を渡すことでした。

はじめは、緊張と不安でうまく笑えず「どうぞ」の一言しか言えま  
せんでした。

しかし、もらった方々からは「こんなようけもらってええの?」、  
「うれしいわ」、「ありがとう」などと私の心が軽くなる言葉をたくさ  
んかけて頂きました。今までつらいことがあったはずなのに笑顔でも  
らってくださるみなさんの気持ち、表情、言葉、すべてにとっても感動  
しました。

そして、そんな方々をみると自分も楽しくなり、「頑張ってく  
ださい」「また来てください」「ありがとうございます」とすこしずつ  
感謝の気持ちを伝えることができました。

また、炊き出しの最中はサポーターのみなさん全員が楽しそうに笑  
い合っているのが印象的でした。

しかし、たった一言、言葉を交わしたただけなのに、まるで話し合  
をしたかのように通じ合っているサポーターのみなさんとサポーターさ  
れる側のみなさんの一体感を何だか不思議に思いました。

後日、祖父と炊き出しについて話しているときその理由がわかりま  
した。

祖父を含め、炊き出しサポーターのみなさんはこの活動を約二十  
年間続け、一回の炊き出しでカレーライスを千食、これまでで合計  
二十五万食作り続けていたからだ。

その数字に私は、驚きと感動の二つが心の中に広がりました。

炊き出しに参加したその日、「誰かのために」「何をすれば喜ん  
でもらえるか」など自分以外の人のためにたくさんのことを考え、調  
理開始から全て配り終えるまで約五時間ずっと立ち続けました。真夏  
の時はそれ以上の労力が必要です。まだ若い私でも、手足は痛く、体  
がだるくなり、疲れを感じていたことに気がきました。

しかし、その活動を毎月繰り返し続ける。このことは、決して簡単  
なことではないと思います。やっついてつらくなるときも、あきらめ  
たくなるときもあったと思います。

だけど、毎月来てくださる方、一回の炊き出しをずっと待つてくだ  
さる方のために続けていく。

そんな祖父と炊き出しサポーターのみなさんを尊敬しています。

「続ける」ということは、誰に何を言われようと自分の意志を曲げ  
ず、誰かのために努力するからこそ、信頼関係が生まれ成り立つのだ  
と思います。

炊き出しを通して学んだ「様々な人と  
の出会い」と「言葉からの感動」「継続  
が持つ大きな力」を信じて、笑顔と幸せ  
にあふれる世界を私は築いていきます。







「男のくせに」「女のくせに」と言われて、自分のしたいことができなかつた。そういう経験をしたことがある人がたくさんいると思います。私自身、そういった経験で苦い思いをしてきました。

私は中学生になり、「男子との体力の差」を理由に、力仕事を任せてもらえないことが増えていきました。手伝うことが大好きな私にとって、活躍の場を奪われたような気がして、とても悔しく感じました。私の周りの男子にも、同じ思いをしている人がいました。彼らは飾り付けが得意で、何か行事があるたび、とてもユニークでセンスのあるデザインで、会場の空気をもカラフルに染めてくれました。しかし、「女子の方が丁寧」と、仕事も任せてもらえなくなり、すごくがっかりしていました。

私は、「男だから」「女だから」という偏見で、その人の意欲や、力を発揮できる機会を奪ってはいけないと思います。そして、未来を担う私たち子供に、その偏見を押し付けてほしくありません。

私は、社会を直接動かす大人たちが、自分で自分に男女の偏見を押し付けて、苦しまないでほしいと思います。

「男は仕事、女は家事」という考えは、昔より減ってきてはいても、今なお社会に根強く残っています。

「男女共同参画」。さまざまな活動で広がりがつつあるこの考え方は、私たちに希望に満ちた未来を感じさせます。

令和元年の調査で、「子供ができて仕事も続ける方がいい」という男性の割合が、約六十パーセントでした。この数値は、三十年前の三倍です。しかし、「子供ができて」というところに、育児や家事は女性がするという考えがうかがえます。

みなさんは、「おとう飯」という活動を知っていますか？ お父さんたちが作るご飯を紹介していく企画なのですが、私の住む中能登町でも行っています。

この「おとう飯」のホームページに書かれていた言葉が、とても心に残っています。

「立派な料理を作らなければいけないと思っていたあなた。いいんです。」

これを見たとき、私は「確かに！」と思い、同時に、自分の偏見に気づき、はっとさせられました。

家庭料理といえは、レストランほどではないけど、立派なイメージが私にはありました。でも、立派である必要などないのです。自分も料理をしたい、家族の笑顔を見たい。その意欲を、「簡単だけど、ご飯を作ろう」という行動に移すことが大事なのです。

私は父の作る、ざく切り野菜のチャーハンが大好きです。作っている父は、とても楽しそうで、その分おいしさが百倍増します。いつか「お父さんの味」が「おふくろの味」と同じくらい、メジャーになってほしいです。

「男でも」「女でも」一人一人が男女の枠を越えて、個性や能力を發揮することができる、そんな社会を実現していくために。

私は、まず、自分自身が持っている偏見を確かめることから、始めたいと思います。そのうえで、周りの人が男女に対する偏見で物事を進めていたら、「それは違う」とはっきり言う。「男子が飾り付けをしてもいい」、ではありません。「男でも」「女でも」、意欲のある人、得意な人、誰でも行動していいのです。

私は、これから、身近な一人、二人が生きやすくなるのが、大きな変化へとつながると信じて、行動していきます。

この社会の、一人一人の可能性が広がることを願いながら。





## 奨励賞 私たちにとって「働く」とは？

小松市立松陽中学校 三年 橋 紀仁

みなさんこんにちは。今ここにいる皆さんに質問します。皆さんは「働く」ことについて考えたことはありませんか。そして、「働く」とはどういうことだと思いますか。私は「働く」とは「誰かのため」「何かのため」にすることだと思います。そして、この事は多くの仕事に共通していることだと考えます。私がこう考えるようになったのはある一本の映像を見たことがきっかけです。

私は、学校の総合的な学習の時間で、アフリカのある二人の兄弟の映像を見ました。その兄弟は家が貧しく、親が病気で働けないため親元を離れて出稼ぎに行っていました。その仕事はカカオの収穫から豆の乾燥までを行うもので、いつ怪我をしてもおかしくない過酷なものでした。一日に何時間働いても収入はごく僅かなものです。また、彼らは学校に行く時間もお金もありません。兄は学校に行っていました。弟は経済的な理由で行けなくなっていました。弟は学校に行ったこともないので、インタビューで兄は「本当は学校に行って勉強したいけどお金がないから行けない。だからせめて弟には学校に行ってほしい。」と話していました。私にも弟がいるので、その言葉を聞いて彼の気持ちが分かり、複雑な気持ちになりました。

ユニセフの報告書によると、二〇一八年時点で、世界では約五千九百万人もの子どもが小学校へ通っておらず、約六千二百万人の子どもが中学校に通っていません。先程の兄弟のような子どもたちが世界には大勢いるのです。

そんな中、今、世界では貧困や教育格差に苦しむ人々を支援する営利を目的としない活動が広く行われています。

例えば、青年海外協力隊で活動されている皆さんは、難民の子ども達に授業を行ったり、農家を巡回して畜産・家畜の技術指導を行ったりなど、その地域の方々のために自分の利益に関わらず精力的に活動されています。調べてみると、他にも多くの団体が世界中で活動を行っていることを知りました。

私はこれらの事を知り、仕事とは「誰か」のためにするものだと考えるようになりました。そして、そう考えているうちに自分たちの周りにはある多くの職業はどんな形であれ必ずどこかで誰かの役に立って

いることに気付きました。また、社会には会ったこともない誰かのために真剣に働いている人たちが大勢いるということも知りました。

社会には自分の利益のために仕事をしている人たちが少なからずいると思います。皆さんはどう思われますか。自分の利益のために働くのは果たして誰かのためにしていることと言えるのでしょうか。私は決してそうではないと思います。自分の利益ではなく他人の利益のためにしてこそ「本当の働く」と言えるのではないのでしょうか。これがきれいごとだと思う人もいると思います。ですが、私たちが生きている社会は何かの役に立ちたい、誰かのために働きたいという人たちがいるからこそ成り立っているのだと思います。そういう人たちが社会を良い方向に導いてくれると私は信じたいです。

私はまだ将来なりたいたいものは具体的には決まっています。ですが、世界の貧困や教育格差に直面し苦しんでいる多くの人々のために働きたいと考えています。

私は自分の持っている目標を将来実現させるために今勉強を頑張っています。また、自ら積極的に学校行事や生徒会活動に参加しています。学級や学年、学校全体を良くし全校生徒が明るく楽しく充実した学校生活を送れるように日々努力しています。自分が、中学生の間を経験した学級会長、学年リーダー、生徒会長という役は、全校生徒のため、また、この経験を将来に役立てたいという思いがあるからこそ、務めることができています。皆さんにも

将来の夢や目標に向けて努力していることがあると思います。ですが、どこかで迷いが出てくることもあるかもしれません。その時は一度立ち止まってみて、自分が何のために働きたいのかを考えてみてください。そうすればあなたにとっての「働く意味」が見つかるのではないのでしょうか。私はこれから高校・大学と、自分の将来の目標に合った進路を選び自分自身を磨いていきたいです。





東京オリンピックが、現在開催されています。このオリンピックに出場するために世界中で選手選考が行われ、「一秒」「一点」「1cm」というごくわずかな差で明暗が分かれたことでしょう。どうしても、代表に選ばれた人が勝者、選ばれなかった人が敗者という印象がついてしまいますが、選ばれなかった人は本当に敗者なのでしょうか。今年四月、競泳の日本選手権において、僕は二人の選手から心が震えるような衝撃を受けました。

一人目は、池江璃花子選手です。女子一〇〇mバタフライで、東京オリンピックのリレーでの参加標準記録を突破して、見事に優勝したのです。池江選手は、二〇一八年のアジア大会で六冠を達成し、東京オリンピックでのメダルを期待されていました。しかし、二〇一九年に予想もしていなかった白血病を発表。オリンピック出場どころではなくなっていました。しかし、想像をはるかに超える辛い治療を乗り越え、「勝つための練習はしてきた。」という通り、復帰後は陸上や水中トレニング以外にも、食事もトレニングとして努力を積み重ねて代表をつかみ取りました。

もう一人は、女子四〇〇m個人メドレーに出場した清水咲子選手です。清水選手は、これまでに何度も日本代表となり、リオオリンピックにも出場した実力のある選手でした。しかし、決勝でオリンピック派遣標準記録を突破したものの、三位となり代表から外れてしまいました。レース後の涙する様子に勝負の厳しさを感じました。

天井を見上げ、顔を覆っていた清水選手でしたが、代表に選ばれた選手が近づくと、満面の笑顔で後輩の健闘をたたえる姿がありました。僕は、清水選手の心の強さに胸が熱くなりました。この時、僕が清水選手の立場だったら、自分の悔しい気持ちをぐつとがまんして、後輩を笑顔でたたえられるだろうかと思っていました。

奇遇なことに僕は、先月行われた県中学校水泳大会で、まさに同じような体験をしました。一〇〇m自由形予選、全体の三位で決勝進出を決めました。決勝で三位に入れば北信越大会に出場できます。目標

としていた北信越大会が手の届くところにあり、僕は何としても三位以内に入りたいと思いました。しかし、決勝レースでは〇・〇八秒というわずかな差で四位でした。レース後、僕は頭が真っ白になり、ただ涙があふれて止まりませんでした。悔しさと悲しさで何も考えられない時間が続きました。少し気持ちが落ち着いてきたとき、ふと清水選手のことを思い出しました。僕は自分のことで頭がいっぱいになり、北信越出場を決めた後輩に、声をかける余裕はありませんでした。池江選手のように、大きな壁を乗り越え、夢を叶えることができた選手も、清水選手のように、周りから認められる程の努力をしてきても思い描いた結果が出し切れなかった選手もいます。夢を叶えることは、誰もが憧れることであり、理想です。しかし、夢を叶えられなかった人は、努力をしていなかったわけでは決してありません。うれし涙や悔し涙は、努力した人だからこそ流せるものだと思います。その努力を理解しようとしなくて、「勝者」「敗者」と決めつけてはいけません。僕は思います。「オリンピック代表に選ばれたから」「優勝したから」「合格したから」が、勝者の基準ではなく、その人が自分自身にどれだけ恥じない努力をしたかが人として重要なのだと思います。今、自分のレースを振り返ってみても、どこにも余力は残っていない。自分の練習も今まで以上に自分を追い込んでしてきたと思います。僕の中学校最後の夏は、自分の力を出し切れ、後悔はありません。







私は三年前から、「認められることは自信になり、自信を持つことは自分の成長につながる」という考えを持つようになりました。私がそう考えるようになったのは、六歳から習っている柔道の大会がきっかけでした。

私は、今年の県大会で二位になり、先日の北信越大会に出場しました。技術も体力も向上してきていると感じています。しかし、実は私は、表彰台に上がることなんて考えられない、試合をする前から、どうせ勝てないだろうとあきらめているようなとても弱い選手でした。そんな弱い私を変えてくれたのが、小学校五年生の時にあった大会でした。

その大会は五、六年生だけが出場する、全国へつながる重要な大会だったので、私はいつもより一生懸命練習に取り組みました。そして迎えた大会当日。その練習の成果が出たのか、準決勝まで勝ち進みました。「これで三位になれる。」そのとき私は、準決勝まで来れたという結果に満足していました。

そんな思いでいたとき、私は他のチームの先生に声をかけられました。

「黒宮さん、強い相手によくやったな。」

その時初めて、準々決勝で戦った相手が強豪選手だったことを知ったのです。そしてその先生の言葉が、初めて私に自信を与えてくれました。「私は強くなっている。」自分の今の力を、自分自身で認めることができたのです。「強い相手によくやった」たった一つのその言葉で心に火がつき、準決勝では一本勝ち。そして決勝戦では、一度も勝つたことのない相手に優勢勝ちで優勝することができました。もし、準々決勝の後、あの先生に声をかけられていなかったら、「勝ちたい」という強い気持ちを持たないまま、そこで終わっていたと思います。私を認めてくれた先生の言葉は私に自信を与え、その自信が優勝へと導いてくれました。そして何より、「勝負に挑む強い気持ち」に気づかせ、精神的にも大きく成長させてくれたのだと思います。

誰だって、誰からも認められなければ、自分に自信を持つことはできないだろうし、自分の価値すら分らないかもしれないかもしれません。だから、人から認められるということはとても大切なことだと思います。しかし、私の周りにも、褒められ、認められているのに、素直に受け止められず、結局自分を否定してしまう人がいます。でも、自分を否定していただかりでは、そこから歩をみ出すことは難しいと、私は思うのです。まず大切なのは、「自分自身をしつかりと見つめて、どんな自分も認め、気持ちを高く持つこと。」それが、自信をもつ第一歩になるのではないのでしょうか。なぜなら、自分を知り受け入れることで、「苦手なところを頑張ろう。得意なところをもっと伸ばそう」と思えるからです。そしてそれがつながって、どんなことでも全力で取り組めるようになり、もっと成長できると思うのです。私はこの考え方をするようになってから、ありのままの自分を認め、気持ちを高く持ち何事も全力で取り組めるようになりました。その結果、さまざまな分野で良い成績が収められるようになり、それもまた自信につながっています。

私は、これからもさらに高みを目指して柔道に励んでいきます。柔道を通して、自分が周りから認められ成長できたように、私も周りの人を「認めること」で、共に成長していきたいと考えています。





加賀市には、三つの温泉があります。山中温泉、山代温泉、そして、僕が住んでいる片山津温泉です。

片山津温泉が発見されたのは、江戸時代。発見されてから二三年後の明治時代に、人々が入浴できるようになり、片山津最初の温泉旅館が開業されました。

そんな片山津温泉は、観光客が年々減少してきています。「昔は今よりもにぎわっていて、観光客もたくさんいたんやよ」と両親から聞いたことがあります。でも、僕にはその光景が思い浮かびません。正直に言うと、今の片山津温泉は、温泉街という感じはしません。温泉通りにある店の多くはシャッターが閉まっていて、閑散としています。また、お客さんと呼べるスポットは少なく、片山津で一日中楽しめるかというところ、午前中で見るところがなくなっています。地元の方々も、カモやんのグッズや、晶子染め、また、ここでしか食べられない源泉豆腐作りの体験などで、観光地片山津をアピールしてはいませんが、これらを求めてくる観光客は少ないです。

そんな片山津温泉を、昔のように元氣な観光地に戻すには、どうすればいいのでしょうか。僕たちは、総合的な学習の時間で、一年生の時に地域調べを、また、二年生からは修学旅行で活性化を図るために片山津の特産品を販売するなど、片山津PRを計画してきました。僕は、片山津PR実行委員の一員として、特産品を売るためにどんな工夫ができるかや、パンフレットや動画の制作など、中学生の僕たちにもできることがあるはずだという気持ちで、計画を進めてきました。しかし、コロナウイルスの影響で修学旅行の行先が変更になり、予定していたPR活動ができなくなっていました。

そこで、僕たちは、これまでの流れにとらわれない中学生らしい柔軟なアイデアで片山津を活性化させようと、「片山津活性化プロジェクト」に発想を転換し、現在、様々なアイデアを出し合っています。

例えば、営業できない旅館を「世界一怖いホラーハウス」にする、片山津のシンボルである柴山潟に「水上アスレチック」を作って大会を開く、また、賛否両論はありますが、能登町の「イカキング」を参考にして、片山津温泉の特産である、温泉卵をモチーフとしたオブリエを作るなど、面白い案がたくさん出てきています。僕たちはこれらのアイデアを地域の方々に発信しようと思っています。観光協会や旅館組合の方々は、こんなアイデアが実現するわけないと思うかも

しれません。しかし、うまくいくかはわからないけれど、やってみないと、伝えていかないと、前には進んでいかないと僕は思います。

片山津に住んでいるある方が「あと何年かしたら、『そういえば片山津温泉ってところが昔あったねえ』ってなりそうや」と、冗談めいたことを言っていました。

その言葉を聞いて、僕はドキッとしました。僕は片山津温泉が大好きです。このままだと、冗談ではなく、本当に消えてしまうかもしれません。

大好きな片山津をこれからも守っていくために、また、観光地としての賑わいを取り戻すために、僕たちができることを考え、精いっぱい頑張っていくしかありません。このまま何もせず、片山津温泉が急に賑わうことはありません。でも、僕たちが片山津のために少しずつできることを実行していけば、片山津の未来は開けてくると信じています。

「片山津は田舎だ」「片山津はすたれている」などという声が聞こえてきますが、みんな片山津のことが好きで、片山津温泉を守りたいと思っているに違いありません。

課題がたくさんある片山津温泉ですが、急ぐのではなく、ゆっくりでも昔のような観光地に戻していきたいです。

修学旅行の行先は変更になりましたが、僕たちは能登で地域活性化について学ぶ機会を得ることができました。日本一のおもてなしで有名な和倉温泉、地域活性化に成功している穴水の能登ワイン、観光客をたくさん呼び込んでいる輪島の朝市などから、それぞれの地元の人々が地域活性化のためにどのような取り組みをしているかヒントを得て、学んだことを片山津の活性化にいかそうと考えています。

今、僕たちができることはほんのわずかなことかもしれませんが、しかし中学生の僕らだからこそできることを積み重ね、少しでも片山津温泉に観光客が戻ってくるように、また昔のような賑わいを取り戻せるように、片山津温泉を元気にしていきます。







私の父はミャンマー人で、私の母は日本人です。そして私はミャンマーで生まれ育ちました。私の母国、ミャンマーはとても美しい国だと思っています。それが間違いだっただのかと感じさせる出来事が起きています。

二〇二〇年三月まで、私はミャンマーのパテインという都市の私立学校に通っていました。ミャンマー人の八割以上が仏教徒で私も仏教の信者ですが、その学校にはキリスト教、イスラム教、ヒンズー教の生徒もいて、私の一番仲良しの子はキリスト教徒です。三月に、一年で一番大切な進級試験を終えると終業式で、今度はみんなと学校で会うのは六月の始業式です。終業式の後、恒例の水掛け遊びを楽しみ、友達と再会を約束します。

二〇二〇年三月、長年闘病中の母方の祖父に会いたいと呼ばれ、私は日本にやってきました。一月半の滞在の予定でした。

その頃のコロナといえば、中国や日本でだけ流行している病気でした。私が住んでいたマンションには両親の古くからの友人やその家族がともに暮らしていて、日本に行く事を言うとは本気で反対されました。理由は私たちが心配するのが半分、私たちがウイルスを持ち帰るのを心配するのが半分、でしょうか。しかし最後には日本から帰ったらマンション共用の階段を使わずに、自分の部屋のベランダに直接はしごをかけて行き来してね、と冗談を言って送り出してくれました。

それからコロナが世界中に広まり、その年の九月になってもミャンマーに戻る目処が立たず、私は芝原中学校に編入することを決めました。初めての日本での学校生活は楽しかったです。コロナで制限されながらも、美しい景色や四季の移り変わり、珍しい料理、それらの写真やミャンマーに残った父、ミャンマーの友達、家族の様に親しい仲間達に、毎日送りました。そして想像しました。同じ時にミャンマーで咲いている花の色、風の温度、料理の匂い、日本と同様に美しく、それ以上に懐かしいミャンマーのことを。コロナの影響でミャンマーの学校は閉鎖されてロックダウンになりました。みんな自宅待機にうんざりしていたようで、私の送った写真や動画を楽しみにしてくれていました。

二〇二一年二月、そのニュースに私は信じられない思いでした。それは、ミャンマーの国軍が、国民民主連盟(NLD)を率いる国家顧問のアウンサン・スーチー氏を拘束したという悲しいニュースでした。

二〇二〇年十一月に行われた選挙で彼女らNLDが不正を行ったというのが拘束の理由です。その選挙については周りの大人が話題にしていたので私もよく覚えていますが、二〇一一年民政移管、二〇一五年NLDが赤いTシャツ、反対側の支持者は緑色のTシャツを着るので立場の違いを興味深く思っていました。しかしその選挙の結果がなぜこのようになるのでしょうか。

私は二〇〇九年生まれです。昔の軍事政権の行いは大人から聞いて少しは知っていましたが、二〇一一年民政移管、二〇一五年NLDが選挙に勝利してからのミャンマーは平和でした。少なくとも私の周りでは。しかし、思い返してみると、国軍がバングラディッシュ系イスラム教徒ロビンギャや国境近くの少数民族に対して行っている暴力や迫害に国際的な批判を受けているニュースは聞いたことがありません。それは私に関係ない人たちの話だと思っていたのです。二月の軍事クーデター後、私はどんな素敵な物を見つけても写真は撮りません。今は写真を撮って送っている場合ではないと思っただけです。ニュースで流されるミャンマーは私の知っているミャンマーではありません。武器を持たず、素手で立ち向かう市民に、軍は発砲します。国軍は、国境で行っていた残虐行為を大都市でするようになりました。国境で行っている時にもっと私たちが非難していれば、と悔やまれます。不正を見て見ぬ振りをすれば、不正が自分の身に降りかかるのです。私が美しいと思っていた国は幻でした。そして私自身も、自分に関係のない迫害には無関心の酷い人間でした。

あれほど私の訪日に反対していたミャンマーの人たちは、私たちが日本において本当に幸運だったと喜びます。コロナ感染者が急激に増え、感染者も、そうでない他の患者も、医者に診てもらえないので、まるで地獄だと現地の人は言います。私は、本当はミャンマーにいて一緒に戦いたかった。でも今は違います。残念ながら、ミャンマーの教育を受けていては、軍事政権に立ち向かうことができません。本当に美しいと思える国をつくるために、日本で、そして広い世界で努力して学んで、正義を貫く勇気を身につけたい。





マスクをつけて生活することが当たり前となった今、あなたは普段の生活で自分の表情を意識することはありますか。

思い描いてみてください。「ありがとう」と言う時の、マスクの下のあなたの表情はどんなですか。

この一年半、私たちはコロナ感染予防のために、人と関わるのがずいぶん減りました。

そんなある日、テレビを見ていたとき、久しぶりに大笑いをしたのです。声を立てて笑うこと自体久しぶりで顔が疲れ、表情を動かすことがなくなっていたことに気がきました。その時、コロナ感染が広がるまでは、いつも笑顔で「おはよう」と優しく挨拶してくれていた見守り隊のおじさんが、今では無表情で寂しい気持ちになったことも思い出したのです。

私は、このコロナ禍で笑顔について考えるきっかけを得ました。そして、その大切さについて、二つ気づかされたことがあります。その一つは、笑顔は人に安心感と勇気を与えるということです。

私は幼い頃から、人によく「笑顔がチャームポイント」と言われてきました。正直あまりうれしくありませんでした。そんな言葉は取り柄のない人に言うものだと思っていたからです。しかし、それは間違いました。休校中に部屋を片付けていたときのことです。小学校卒業の時にもらった寄せ書きを見つけました。そこには「いつもニコニコでみんなを元気にしているね。センキュー」「悲しいときにいつも笑顔でいてくれてありがとう。その笑顔に救われたよ。」「実行委員になったとき、嫌がらず、むしろ笑顔だったから、こっちまで楽しかった。」など、いろいろな人からの感謝や応援の言葉がありました。

そこで初めて、私の笑顔がこんなにたくさんの人を励ましていたのだと気づきました。この日から、「笑顔がチャームポイント」は私の最大の取り柄になったのです。

笑顔の大切さについて気づいたことの二つ目は、笑顔は人の心や体をいやして、元気にしてくれるということです。休校中に見た、実話

が基になった映画「パッチ・アダムス」では、アダムスが入院仲間を笑わせているうちに、彼自身も回復し、医者になって「笑い」で心を治療する姿が描かれていました。笑顔は、ストレスを軽減する、やる気を出すなど、体にも心にも良い効果をたくさん持っているのです。

私も、これらの笑顔の力に気づいてからは今まで以上に表情を大切にできるようになりました。楽しいときだけでなく、友だちの相談に乗るときも、笑顔で話を聞くように心がけています。マスクをしていても相手に伝わるように、目元を意識したり、鏡を見て練習したりもしました。

そして、自分の表情に気をつけるようになると、周りの人の表情にも注目するようになりました。注目するようになると目が合うようになり、目が合った人に笑顔に向けて、相手からもニコッと笑顔を返されると、とてもうれしい気持ちになります。自分が笑顔でいることを意識することで、今まで見過ごしていたことに気づくことができました。見守り隊のおじさんのまなざしの温かさをしっかりと受け止めることもできたと思います。

笑顔が心がけるようになってからは、毎日がとても気持ちのいいものになりました。心に余裕ができ、自信を持てるようにもなりました。運動会の応援リーダーに立候補しました。応援内容の相談をするときもマスク越しでも伝わる笑顔が心掛けています。みんな笑顔で、話し合いは建設的でスムーズなものになっています。

「人は幸せだから笑顔になるのではなく、笑顔だから幸せになるのだ。」アメリカの心理学者の言葉です。笑顔でいること、笑顔伝えることを実践してきて、この言葉の意味を身に試みて感じています。あなたも笑顔の力を試してみたいかがですか。







「情報社会」今日のような、情報の価値と役割が高まっている社会のことです。二十一世紀になってパソコンや携帯電話が著しく普及し、インターネットが世の中に広く行き渡りました。インターネット・IT・IoTといった情報技術は私たちの暮らしを便利で豊かなものにしました。例えばスマホ一台でできること。友達とのチャット、ワンクリックでの検索、YouTubeを見たり、オンラインショッピングをしたりと様々です。「私はなんて幸せな時代に生まれたのだろう。祖父母や両親の時代は不便だったんだろうな。」とつくづく思います。と、ここで一つ。私は先ほどこの情報社会を「幸せな時代」と評価しましたが、祖父母、両親は当時、日々不便さを感じて「幸せでない暮らし」を送っていたのでしょうか。すると彼らは口をそろえてこう言います。

「今思えば確かに不便だったかもしれない。でも当時はそれが当たり前だったから、そんな風に思わなかったし、十分幸せに暮らしていた。」と。

私はここで情報化によってもたらされる便利さは必ずしも幸せに比例しないということに気づかされました。では、情報社会は私たちに何をもたらしたのでしょうか。

情報社会において私たちは「便利さ」という大きな恩恵を受けました。一方で、視点を変えて「影」に目を向けると、便利さとの引き換えに個人情報の流出やコンピュータウイルスによる新たな犯罪、デマ情報による風評被害など、多くの問題が生まれたことを見えてきます。中でも、コロナ禍の今、さらに問題となっている情報格差について、私も実感したことがあります。先日、隣に住んでいる祖母から、一本の電話がありました。「ワクチン接種のスマホ申し込みについて教えてほしいことがある。」とのことだったので早速駆けつけました。そして「これは。」と思いました。生年月日、住所など入力する情報は多く、中でも個人番号やメールアドレスは細かく、祖母にとっては厄介なものだったようです。私は祖母のサポートをし、ガラケーでな

んとか予約しようとしていた祖父の分も予約を完了させることができました。感謝されて嬉しくなった一方で、他の人たちはちゃんと予約できたのだろうか、とも思いました。また、ニュースでは高齢者がワクチン予約のため一週間電話をかけているがつかみならず、困っているというものも見かけました。このような生活や命に関わる場面で情報格差が生じてしまうのは、大きな問題であると思います。

ところで、私たちは情報技術の発達で県外や海外にいる人とも、いつでもどこでもコミュニケーションを取ることができるようになりました。遠くの人とつながることができるのはいいことです。しかし、近くの人とのつながりはどうでしょうか。近くの人、つまり地域のコミュニティが失われつつあるのではないかと思います。つながればつながるほど孤独を感じる、矛盾しているようで実際に起こっていることです。情報技術はそんなきっかけになってはいないでしょうか。

さて、このように情報社会は光と影の二つの側面を持っています。そして、これからの社会も情報化は進み続けるでしょう。私は、人々が情報を上手く利用し、誰しもが社会的に平等で、お互いに助け合える、そんな社会が実現されたいなと思います。その実現の鍵となるのは、やはり二十一世紀に生きる私たちです。実際、私の身近にもできることはたくさんあります。時には家族や友達との第二のコミュニティとして活用し、時には注意すべきものとして何もかも鵜呑みにしない。このようにして、一人一人が意識をして情報と向き合っていくことが、何よりも大切なことなのです。





「VUCA時代」あなたはこの言葉を耳にしたことがありますか。「VUCA」とは、変動性・不確実性・複雑性・曖昧性の略です。テクノロジーの進化によって私達を取り巻く環境が大きく変化し、将来の予測が困難な現代を、的確に言い表した言葉だと言えます。では、そんな現代を生きていく私達には、どのような力が必要なのでしょうか。

近年、スマホ決済の普及、コンビニの無人化など、テクノロジーの進化によって社会は大きな変化を遂げています。中でも、私が一番身近に感じるのは学習ツールの変化です。私が小学生の頃、わからない言葉に出会うと国語辞典をめくりました。常に机の横にかけ、国語だけでなく、社会の時間にも手に取りました。また、知りたい情報があれば、図書館に行きました。本をひらくと、そこには知りたい情報はもちろん、未知の世界が広がり、どんな事柄でも詳しく調べられました。このように、本や辞典を用いて学習する機会が多くありました。しかし、現在はわからない言葉はインターネットで検索します。今年に入り、常に机の横にあるのはタブレットです。授業でSDGsについて調べるだけでなく、班で交流する時、動画やグラフを見せながら発表できます。英語の時間、分からない単語の意味を教えてください、電卓はもう必要ありません。このように、たった数年で学習ツールは激変しました。まさにこれは、変動性の代表だと言えます。そして今、私達に記憶能力や計算能力が重視されなくなったということ、人ではなくてもできること、つまりAIが代替できることが増えたということ、痛感させられます。

また、テクノロジーの進化は、職業にも影響を及ぼしていると言えます。YouTubeのこの仕事を将来の夢とするのが現実的になったのはいつからでしょう。たった数年前は、大人にばかりにされるような夢でしたが、今では「職業」として確立しつつあります。今までの「非常識」が「常識」になる。社会の急激な変動性を実感させら

れます。

では、十年後の世の中——つまり私が社会に出て働く時代はどうなっているのでしょうか。「人間の仕事はAIの発達によってどんどんなくなっていく。」こう聞いたことがあるという人は多いと思います。が、具体的にどれくらいがなくなると言われているか知っていますか。なんと日本の約半分の仕事がAIによって代替され、消滅すると予測されているのです。たしかにスーパーでは、セルフレジの普及が急激に進み、都市部では無人コンビニも導入されると聞きます。今年、高校受験を控え、「将来の夢」について幾度となく考えてきた私にとって、衝撃的な数字でした。今までの職業の選択肢は、既存の仕事のみだったからです。それらは十年後、仕事として残っているのか分かりません。しかし、言い換えれば、五十%の新しい仕事はこれから生まれていくと考えられます。未来に残る仕事、これから生まれる仕事に共通して求められるのは、常識にとらわれない、創造力だと思います。既存のもの同士を合わせて新しいものを生み出す力。現代の当たり前とAIを合わせて新しいものを生み出す力。これらこそが、人間じゃないとできないこと、つまり私たちに必要な力ではないでしょうか。

VUCA時代を生きる私達が未来を完全に予知することは難しいです。しかし、未来の社会を意識して現代を生きることができません。ただ夢に見た世界を待ち望むだけでなく、次なる時代を生きる私達こそが、自発的に世界を創造していくことが必要なのではないでしょうか。





## 奨励賞 障がいのある人々

野々市市立野々市中学校 三年 満田 弥音

今から障がいを持つ人々について、私の考えを話します。短い時間ではありますが、これをきいたみなさんの意識が少しでも変われることを願っています。

私はこれまで、障がいを持ったことはいないし、家族に障がいを持つ人がいるわけでもありません。そんな私が、彼らについて考えるようになったのは断捨離がきっかけとなっています。春休み、私は自分の部屋で断捨離を行っていました。なつかしい物がぞくぞくと掘り出される中、「思いで箱」と称された箱が出てきました。箱を開いた私はある日記を見つけます。それは、私が小学四年生の時のもので、あまりのなつかしさに思わず中を開いてじっくりと読み返してしまいました。その頃、私のいたクラスには障がいを持つ子が三人いて、日記にはその三人についての記述がたくさんありました。しかしその内容は、どれも今の私にとっては思わず首をかしげるものばかりでした。中でも衝撃的だった文が「Aちゃんが今日、私の髪をほどこしてしまっただ。怒りたかったけど、障がいのあるAちゃんに怒るのも気の毒だし、そんなAちゃんがかわいそうだったので十分くらい遊んであげた。そしてたら喜んでくれて、良い事をしたと思った。」というものです。人によっては「どこが衝撃的なのだろう？むしろ、ほっこりする思い出じゃないか。」と思うかもしれません。実際、町中で障がいを持つ人に会った時、多くの人が感じるのには「かわいそう」「気の毒だ」ということだと思えます。恐らく、この日記を書いた小学四年生の私もそう思ったことでしょう。しかし今、私は問いかけたいと思います。はたして、そんな言葉を障がいを持つ人達は求めているのでしょうか。「かわいそう」という言葉は一見、同情に満ちた優しく温かい言葉のように思えるかもしれませんが、しかしその言葉は「健常者」という立場から、自分と、障がいのある人たちを線引きしているように私には思えるのです。なぜなら、その言葉は暗に、「自分たちは普通だけどあの人たちは普通じゃないからかわいそう」という意味を含んでいるから。自分と、相手を比べた上で出た、無意識な差別の言葉だから。

ここまで考えた上で「かわいそう」と言う人はいないと思います。逆にそれを言う人は障がいのある人について、彼らの立場になって考えたいのではないのでしょうか。では、私たちはこれからも障がいのある人を見かける度に、遠くの方から「かわいそうだね」とささやき合っ

ているだけでいいのでしょうか。その言葉によりそう心はあると思いますか。教科書の一ページにも満たない浅い知識で、障がいのある人々不幸と決めつける、彼らの心を知ろうともしない、そのままいいのでしょうか。自分たちが普通で、障がいを持つ彼らは不幸でかわいそう、本当にそうなのですか。私たちに求められているのは安易な憐れみや同情の言葉ではなく、知ろうとする努力、手を取り合おうとする心だと思っています。

少し想像してみてください。あなたは今、友人と駅の中のおみやげ屋さんにいます。前の方から白いつえをついた目の不自由な男性が歩いてきて、あなたの横の通路を通っていきました。その後も何度も彼は同じ通路を通ります。彼は駅の中をぐるぐると行ったり来たりしているようです。さて、あなたならどうしますか？この場合、多くの人は特に何も思わないと思います。ついこの前、私は実際にこの状況に置かれました。私も大多数の人と同じように、彼が今、助けを求めている可能性が高いと分かっているながら、「話しかけても迷惑になるんじゃない。」と言い訳をし、彼から目を背けてしまいました。確かに、障がいを持つ人の中には「気を配ってもらえるのは嬉しいが、困ってもしない時に大丈夫ですか、と声をかけられると逆に困惑する」と、障がい者への異常なまでの配慮にとまどう人もいます。ですから、私たちに必要なのは彼らを特別視しないこと。健常者と同じように接しながらも、彼らの生活上の不便をフォローするため、心の壁を取り払っておくこと。それらができてこそ、障がいのある人と私たちの共存社会は成るのではないのでしょうか。

日本のバリアフリーは世界と比べて決して遅れているわけではありません。しかし多くの障がいを持つ人が生きづらさを感じるのには、私たちの、表面上だけではしか彼らの事を考えず、異世界の人の様に接する態度や意識のせいだと思えます。まず、彼らを知りましょう。そして、全員が対等な社会とは何かを考えてみましょう。そこから新しいあなたが始まるはずですよ。







## 奨励賞 愛すべき「普通」

内灘町立内灘中学校 三年 百万 花梨

私は「普通」という言葉が嫌いだ。私は周りの友達よりも作業にかかる時間が長い。簡単な計算をするのも、作文を書くのも時間がかかる。だから、よく友だちに「なんでそんなに普通よりも遅いの。普通にすればもっと早く終わるでしょ。」と言われる。そんな時、私は思う。「私にとってはこれが普通だよ。」と。いつのまにか、「普通」という言葉を言われると私は、行動を制限され、私自身の存在も否定されていると感じるようになった。そう感じるようになってから、いつも考える。「普通って何?」

中学二年生の冬、私は怪我をした。全十字靭帯断裂。全治六ヶ月。医者からそれを聞いたとき、私のことを言っているのだと理解できるまで時間がかかった。中学校最後の大会まで、あと半年。「皆と同じように練習ができない。抜かされてしまうかもしれない。もし、最後の大会に出られなかったらどうしよう。なんで私が…。」そんなことばかりが頭の中をうずまき、涙が止まらなかつた。その後、手術は成功したものの、歩いたり、走ったりと周りの友だちが普通に出来ることが出来なくなつた。六ヶ月。長いようで早く過ぎていく時間。私の怪我は少しずつ回復していった。それでも、私の中から「普通のことすらできない。皆とは違う。普通とは違う。」という思いは消えなかつた。

あれほど嫌いだった「普通」という言葉を私自身が連呼するようになっていた。そんな私を救い出してくれたのは、ある先生の言葉だった。「あなたの普通は他の人の普通とは違う。私の普通も他の人の普通とは違う。」この言葉は、私が抱いていた劣等感を消し去ってくれた。「皆それぞれ「普通」は違う。だから他の人の「普通」にとらわれなくてもいいんだ。」そう思ったら、心が軽くなつた。そこからはゆっくりでいい、自分のペースで少しずつできることを増やしていく。「という前向きな気持ちでリハビリができるようになった。松葉杖なしでの歩行、階段の上り下り、そんな少しのことでも、出来ることが増え、それが自分の中で「普通」になっていくことがとてもうれしかった。その気持ちを感じたくて、リハビリをがんばつた。その結果、私は加賀地区大会、県大会や北信越大会に出場できるまでになつ

た。このような経験の中で、私は「普通」とは何かという疑問に対する自分なりの答えを見つけられた気がする。

「普通」とは何か。辞書には、「広く一般に通ずること。どこにでも見受けられるようなものであること。」と書かれている。しかし、私は少し違うと思う。一人一人が持つていて、この世に二つと同じものがないもの。それが「普通」というものなのだと私は考える。そして、その一人一人の「普通」の中から似たようなものが集まってできるのが、辞書に書いてあるような「社会の普通」なのだと思う。世の中には色々な人がいる。勉強は苦手だが運動は得意な人、男女という概念では表せない性の形を持った人：皆それぞれ、他の人とは違う「普通」を持つている。だから、自分の「普通」を相手に押しつけてはいけない。自分の「普通」からはみ出た人を否定し、敬遠するのはよくないし、逆にそういう人たちをかわいそうと悲観的に思うのも違うと思う。自分とは違う感覚に触れ、考えに触れ、他の人の「普通」を知り、尊重することが大切なのではないだろうか。

しかし、他の人の「普通」を尊重するのは簡単ではない。だからまず、自分の「普通」を愛してみよう。個性と呼ばれるような、大げさなものやきらきらしたものではなくていい。見た目、性格、育ってきた環境、ちょっとした頑張りや成長。ささいなことでもいい。自分の好きなところ、大切にしたい、愛したいと思うところを探してみよう。きっとその気持ちは自分に自信を与えてくれる。他の人の考えを聞いてみよう、尊重しようという気持ちにしてくれる。その気持ちを持つことが「社会の普通」になつた時、差別がなくなり皆が平等に過ごせるようになるのではないだろうか。そして何より、自分自身が楽しく、前向きに生きられるのではないだろうか。

私たちにはそれぞれに愛すべき「普通」がある。もっとそれを皆で大切にしていこう。







『子曰く、「之を知る者は、之を好む者に如かず。之を好む者は之を  
 楽しむ者に如かず。』と。』これは、国語の授業で学習した論語にある、  
 孔子の教えの一つです。私はこの言葉を知ったとき驚きました。こん  
 なに昔から、好きなことというのは強いものだったのか、と感じたか  
 らです。それと同時に自分の好きなこととは何だろうと気になり、考  
 えてみれば自分には夢中になれる好きなことがちゃんとありました。

私の好きなこと、それは絵を描くことです。絵を描き始めたのは小  
 学六年生。本格的に練習するようになったのは、中学一年生の頃から  
 です。絵を描くようになったきっかけは心を大きく揺さぶられるよう  
 な衝撃的な出来事があった訳でもなく、なんとなくという曖昧で不確  
 かなものでした。小学六年生の時、友人の描いた可愛い女の子の絵を  
 見て、「わ、いいな、可愛いな。」と憧れのような気持ちを抱きました。  
 それから、なんとなくその女の子の絵を真似して鉛筆を走らせまし  
 た。今ではその行為が、模写というものだと言語化することができま  
 すが、当時の私は、それが何なのかすら分からない無知な状態で、そ  
 うして出来上がったのは、今見ればきつと嫌気が差すほどの下手くそ  
 な絵。けれど、当時の私はその絵を見て、私もできた、と喜んでいま  
 した。おそらく、絵を描く楽しさを初めて知った瞬間でした。そして、  
 本格的に絵に時間を費やすようになった中学一年生の頃、始まりはこ  
 こでもなんとなくと言う、理由で美術部に入ったところからです。そ  
 のなんとなくのおかげで、絵を描く機会が増え、今、夢中になっ  
 てることを得られました。軽い気持ちで物事を初めてみるのも、人生の  
 分岐点になるのかもしれないと思いました。

なんとなくで始めたものがなぜここまで好きになれたのか、それは  
 絵を描く過程に落ちている楽しさを拾えることができたからだと思っ  
 ています。とても感覚的なものなので、言葉に表すのは難しいのです  
 が、楽しさの一例を挙げるとするならば、自分が思いついたものを形に  
 できる瞬間が私は一番好きです。完成した絵を見たとき、自分が偉大  
 な建築家や、とても綺麗な物語を紡ぎ終えた小説家になったような達

成感がこみ上げてくるのです。また、自分の成長を感じる瞬間とい  
 うのも大好きなときです。前まで描けなかったなかつたものが描ける、  
 前より美しい世界を作ることができる。そのような自分の成長とい  
 うのは、何にでも共通して楽しさを教えてくれるものだと思います。描  
 いて、気づいて、成長して、喜んでと、幾度となく繰り返し返すうちに、  
 絵を描くというのは、私の好きなことになっ変わってしまいました。

私が絵を描くという好きなことをもって変わったことは、何事もよ  
 く『観察』するようになったことです。光によって色はどのように変  
 化するのか、ものの構造、仕組み、人の仕草や表情。その観察する  
 いう行為によって、国語が少し得意になりました。人はどのような時、  
 感情の起伏によってその表情をすのかなどを繋げて考えられるよう  
 になつたからです。一見、関係がなさそうな能力まで好きなことのお  
 かげで高めることができました。これからも好きなことを高めていく  
 中で、より一層成長していこうと思います。このようなメリットもあ  
 りますが、やっぱり好きなことをもつ一番の良さはとても単純で、好  
 きなことって、本当に楽しいんです。之を好む者は之を楽しむ者には  
 及ばない。けれど、好きを知れば、自然に楽しむ者に近づき、強みを  
 もつことができる。きつと、この好きも私の強みになると思います。





現在、多くの場所で新型コロナウイルスワクチンの接種がすすめられています。私の暮らす地域でも多くのお年寄りが「来週受けてくるよ。」「私はもう一回目に行ったわ。」と話している姿を目にします。そんなある日、こんな会話をしているのが聞こえてきました。「もうワクチンを接種したよ。これでマスクしなくても大丈夫。」「そうなんか。私も早く終わらせたいわ。」というような会話です。私は、「ワクチンは症状が出ないようにするためのなのに、なんでそんなことを言っているのか。」「マスクをしないんだらう。」と疑問に思いました。

私の住んでいる地域はお年寄りが多いです。しかし、多くの人に新型コロナウイルスワクチンに関する正しい情報が届いていないように感じます。例えば、ワクチンは症状が出る「発症」を予防するのではなく感染を予防するものだと思っている人、発症することと感染することを一緒にしてしまっている人がいます。

なぜ、間違った認識をしている人が多いのでしょうか。私は原因が三つあると考えています。

一つ目は、書いてある場所や文字の大きさです。首相官邸のホームページには、ワクチン接種を推進するための情報は大きく載っています。しかし、発症や感染に関する情報はすぐ見つかるところにはなく、探してもなかなか見つかりませんでした。見つかったところにも、スマホの小さな画面では、とても見にくいです。読む気もなくなっています。パソコンやケータイを使い慣れている私たちでも難しいものを、お年寄りの人が見つけて読むというのはとても難しいのではないのでしょうか。

二つ目は、「発症予防」という言葉が難しいことです。「発症予防」とは、感染しても重症化させないという意味です。しかし、感染しないと勘違いをしてマスクを外している人もいます。私自身、言葉の意味を知ったのはかなり最近です。実際に学校でワクチンに関するアンケートを行いました。すると、感染予防だと答えた人が全体の四十七%、発症と感染を一緒にしている人が三%いました。

三つ目は、ネットやテレビ以外では情報を得られる手段が少ないということ。ネット上には様々な情報が載っており、知りたいことをすぐに調べることが出来ます。しかし、お年寄りはそもそもスマホやパソコンを持っていない人もいます。ネットの情報はいつでもどこでも読めて便利な反面、お年寄りには不親切です。

ワクチンに関する正しい情報を多くの人に広めるためにはもっと工夫が必要です。まずは、ワクチンに関するホームページにワクチン接種の利点のみをアピールするだけではいけません。「感染しないわけではない」ことや「マスクを外してよいわけではない」ということも文字を大きくし、色を付けて分かりやすいところに載せるべきです。多くの人が目にするホームページを分かりやすくすれば、どんな人でも十分に読むことができるはずです。専門的な難しい言い方をすると、きには、どの年代でもわかりやすい表現にすることで、勘違いをする人が少なくなると思っています。そして、お年寄りのために紙でも配れば、より多くの人に正しい情報が行き渡るはずです。

このような工夫の中で、私達にできることは、マスクをつけていない人がいたらつけるよう呼びかけ、正しい情報を少しでも分かりやすくお年寄りの人に伝えることだと思います。私は、学校みんなにワクチンに関する正しい情報を広め、そのことを更に家族や身近な人に伝えてもらおうと思います。きっと大変だけど、早く新型コロナウイルスが収束するように自分にできることをしていきたいです。皆さんワクチンについて勘違いをしている人がいたら、正しいことを伝えて広げていきましょう。





「はやく収束してほしいです」

「政府は何をしているんだ」

「何とかしてほしいです」

これは、コロナ禍の社会でよく耳にする人々の声です。

人々は本当に収束を願って、そしてそのために行動しているのでしょうか。思っているだけ、願っているだけで行動には移さない人が大半を占めているのではないのでしょうか。なんて無責任なんでしょう。

「思っているだけ。」「願っているだけ。」

この言葉を自分でつぶやいて、私は、はっとしました。

今までの私と今の社会は同じだったのです。今までの私はやりたいことだけを決めてなかなか実行できませんでした。社会に向けて私が発した「なんて無責任なんだろう」この言葉はそのまま私自身に向けられたのです。

あれは、小学校の総合の授業で地球温暖化に関するレポートを書いた時のことです。私は、原因や対策を調べ、最後は「将来、私たちが困らない世界にするために、今、自分ができたいことをしたい。」と結びました。そのときの私は、家族で地球温暖化について話し合い、それを食い止めるために行動しよう。と心がおどっていました。

しかし、実際は何ひとつ新たな行動に挑戦できていませんでした。なぜでしょう。忙しかったから？ 面倒くさかったから？ いいえ、自分が掲げた目標が具体的ではなかったからです。「地球の環境を守る」このことは、小学生の私にとつてあまりにも壮大なものだったのです。だから思っただけで行動に移すことができませんでした。結局、私は、自分の言葉に責任がとれなかったのです。

地球温暖化について考えて何も実行できなかった私。  
意見だけをぶつけているコロナ禍の人々。

今の社会から、私は、言葉と責任について見つめ直すチャンスを得ていました。

誰かの言動や目の前の現状に対し、意見を言うことは簡単です。し

かし、言うだけではなかなか物事は変わりません。自分の発した言葉に責任を持ち、行動に移してこそ、新たなことが生まれるのです。

私の通っている能登香島中学校の生徒目標は、「自己指導能力を身につけ、自ら進んで取り組む生徒」です。

自己指導能力とは、自分はどうするべきかを考え、的確に判断し、行動する力です。つまり、自分の言葉に責任を持ち、その言葉に沿った行動をとることができる生徒を指しています。この目標が絵に描いた餅とならないために、まず、今置かれている状況を理解します。そして、自分ができることを考え、具体的な目標を立てることが大切です。

私は中学三年生です。目指す進路にむけ、勉強は毎日頑張っています。その中でいろいろ考え、悩むことも多いです。しかし、自分の将来のことを人任せにはできません。「自分はどうしたいのか」「今、自分はどうすべきか」「今の自分にできることは何か」と自分自身に問いかけ、その答えを見つけ、具体的な目標を立てたいと思います。そして、その目標の達成にむけ、行動に移し、一歩ずつ前に進んでいきます。







本年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が継続する中、皆さんが一堂に会して本大会を開催することはできませんでしたが、今回、動画で開催されたことは、大変うれしく思います。

発表された十六名の皆さん、どの発表も大変素晴らしいものでした。本日の発表では、身近な経験や世界で起こっている出来事を通して、皆さんは、差別・偏見、人権問題、人種問題等について、どのような事を考え、何を感じているのか、中学生らしく、さわやかな語り口で、豊かに表現されており、興味を持って聞かせていただきました。

また、各々が見いだした課題に対し、自分たちにできることはないか、どうすれば解決できるのかを一生懸命考え、それぞれが導き出した解決策を堂々と発表している皆さんの姿に大変感心させられました。私自身も、自分の生活や行動を振り返るよい機会となりました。

さて、皆さんが活躍する十年後、二十年後は変化の激しい、予測困難な時代だといわれています。そういう時代をたくましく生き抜いていくためには、どんな力が必要なのでしょう。皆さんも考えてみてください。

現在では、AIやドローンなど、十年前、二十年前には考えられなかった技術が、世の中には普通に存在します。

でも、これらの技術を作ったのは、我々人間です。我々人間は、常に現状に満足せず、様々な疑問を持ち、それを解決することで、今の豊かな生活を手に入れてきました。

文部科学省は、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し行動する力が必要だといっています。

まさに、皆さんが、この大会で発表するまでに歩んできた努力そのものです。きつと今後、活躍する人材は今日の皆さんのような人だと、

私は思います。皆さんには、今後の学校の勉強でも知識をただそのまま鵜呑みにするのではなく、常に疑問や課題を持ち、それを解決する姿勢を持ち続けてほしいと思います。

結びに、発表された皆さん、ご支援いただいた先生方やご家族の皆様、さらには、この大会の開催にご尽力いただいた関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。





# 令和3年度 少年の主張石川県大会概要

## 1 趣 旨

中学生が、日常生活での体験や考えを自分自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代における社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらう。

## 2 主 催

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部  
独立行政法人国立青少年教育振興機構

## 3 後 援

石川県市町教育委員会連合会 石川県小中学校長会 石川県PTA連合会  
石川県少年団体協議会 明るい社会づくり運動いしかわ  
石川県青少年育成アドバイザー協会 石川県BBS連盟

## 4 開催期間

令和3年8月19日（木）～9月22日（水）

## 5 開催方法

動画による審査

## 6 出場資格

県大会へ出場する生徒は各地区大会で選出された生徒とし、在籍中学校長へは健民運動推進本部より県大会参加通知をする。

## 7 発表内容

次に掲げる事項の中で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

ア 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など

イ 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど

ウ テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など

## 8 表 彰

最優秀賞（石川県知事賞） 1名

優 秀 賞（石川県教育委員会賞） 2名

奨 励 賞（石川県健民運動推進本部長賞） 13名

## 9 その他

(1) 発表内容は、記録集として発表者、中学校長、青少年団体等へ配付する。また、広く同世代の少年及び世代を超えた人々の意識を啓発するために、健民運動推進本部のホームページにも掲載する。

(2) 最優秀賞受賞生徒は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が11月に開催する「少年の主張全国大会」出場者選考のための全国大会代表審査委員会へ推薦される。

## 県大会審査基準

### 1 採点方法

100点満点とし、各項目の配点は次のとおりとする。

- (1) 論旨・内容 60点
- (2) 表現力 30点
- (3) 態度 10点

### 2 採点上の観点

#### (1) 論旨・内容について

- ア 鋭い感性で、新鮮な主張であるか（中学生らしさ）
- イ 新しい情報や視点があるか
- ウ 個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか
- エ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか
- オ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか

#### (2) 表現力について

- ア 聞きやすく、説得力のある話し方だったか
- イ 話しぶりに熱意と迫力があつたか
- ウ 聴衆に共感と感動を与えていたか

#### (3) 態度について

- ア 中学生らしく、さわやかで落ち着いた態度であつたか

### 3 時間超過の場合の減点

各発表者の持ち時間を5分とし、持ち時間を超過した場合はその時間の長さに応じて各審査委員の点数から減点する。（5分30秒以内は減点しない。5分30秒を超え6分以内は1点、6分を超えると2点の減点をする。）

## 審査委員

- (1) 審査委員長 久下 恭功（石川県市町教育委員会連合会 副会長）
- (2) 審査委員 辻 和久（石川県小中学校長会 理事）  
山田 忠和（石川県PTA連合会 副会長）  
中黒 公彦（石川県青少年育成推進指導員連絡会 会長）  
縄 寛敏（石川県少年団体協議会 会長）  
宮坂 巖（石川県教育委員会事務局学校指導課 課参事）

## 地区大会概要

(1) 加賀地区大会（加賀市、小松市、能美市、能美郡川北町）

「第40回 加賀地区中学生意見発表大会」

主 催：加賀地区市町教育委員会

共 催：石川県健民運動推進本部

日 時：令和3年8月7日（土）13：00～

会 場：能美市根上総合文化会館 円形ホール

審査員：向出 章 （小松教育事務所長）

石黒 和彦 （加南地区教育委員会連絡協議会長）

谷口 徹 （能美市教育長）

寺山 晶子 （小松教育事務所指導主事）

発表者（18名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
その募金 本当に役立つの…？南北問題を考える	川北町立川北中学校	3	伊藤 真琴
スマホにとらわれないためには	小松市立芦城中学校	2	岸 あかり
本当の勝者とは	小松市立松東みどり学園	9	城下 心温
ともに生きる	加賀市立東和中学校	3	北村 悠月
情報化社会を生きるために	小松市立丸内中学校	3	鵜飼 杏詩
生きること	加賀市立山中中学校	3	山下 莉緒
無知による差別	小松市立国府中学校	3	新宅 柚花
「普通」と「個性」	能美市立根上中学校	2	高岡 さくら
認めること	小松市立御幸中学校	3	黒宮 美咲
豊かな自然を守るために	加賀市立錦城中学校	3	松浦 ほの花
人と人とのつながり	小松市立南部中学校	3	増原 秀徳
片山津の未来のために	加賀市立片山津中学校	3	岡田 亘誠
生活の中のあいさつ	小松市立安宅中学校	3	長岡 千晃
すべての人が住みやすい社会	加賀市立橋立中学校	3	伊東 咲耶
人種は違えど同じ人間	能美市立辰口中学校	3	東出 悠成
みんなが幸せになる社会をつくる	加賀市立山代中学校	3	納谷 美咲
私たちにとって「働く」とは？	小松市立松陽中学校	3	橋 紀仁
今に残る女性の権利の問題	能美市立寺井中学校	3	吉田 悠乃

(2) 金沢市地区大会（金沢市）

第74回金沢市「中学生からのメッセージ」発表会

主 催 金沢市教育委員会 金沢市中学校文化連盟弁論部

日 時 令和3年8月18日（水）13：00～

会 場 金沢市教育プラザ富樫

審査員 二見 和男 NHKキャスター

市内中学校国語科担当教諭等

発表者（26名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
相手を理解しようとすることの重要性	金沢市立森本中学校	3	前川 直緒
「知っていること」を「分かっていること」に	金沢市立野田中学校	3	國司田 陽平
人の手で創るこれからの医療	金沢市立緑中学校	3	高木 悠太
理解することの大切さ	金沢市立北鳴中学校	3	中岡 星来
笑顔の力	金沢市立城南中学校	3	高嶋 桜
コロナ禍で感じた『学ぶことの大切さ』	金沢大学附属中学校	3	土山 桃愛
継続が持つ大きな力	金沢市立医王山中学校	3	丸山 里紗
だれもが幸せな世界を	金沢市立犀生中学校	3	中山 千大
勇気	金沢市立港中学校	3	中野 葉月
「責任」をもつことの意味	金沢市立紫錦台中学校	3	入井 翔大
新しい一歩	金沢市立額中学校	3	竹部 由菜
私の人生	金沢市立金石中学校	3	笹島 みなみ
これは「普通」の作文ですか	金沢市立西南部中学校	3	南 響真
美しいミャンマーと私	金沢市立芝原中学校	2	荒谷 光
備えるということ	金沢市立鳴和中学校	3	前島 咲菜
AIと人の共存	金沢市立高尾台中学校	3	倉下 迪子
「厳しさ」の先にあるもの	金沢市立兼六中学校	3	岡口 茉央
この広い世界の中で私達は	金沢市立清泉中学校	3	米谷 一紗
「ひとくち」の重み	北陸学院中学校	2	古屋 七花
今、行動を起こすために	金沢市立高岡中学校	3	石地 樹
貧困から子どもを守れ	金沢市立小将町中学校	3	加藤 那ノ花
家族の形	県立金沢錦丘中学校	3	前川 ひなた
命がある限り	金沢市立浅野川中学校	3	北嶋 真子
応援の力	金沢市立泉中学校	3	中村 百香
「本当の私」に会う日まで	金沢市立大徳中学校	3	五味 愛依子
繋ぐ	金沢市立長田中学校	3	千田 百花



(3) 石川中央地区大会 (かほく市、白山市、野々市市、河北郡)

「第31回 (令和3年度) 少年の主張石川中央地区大会」

主催 石川県 石川県健民運動推進本部

共催 野々市市教育委員会 石川県青少年育成アドバイザー協会

開催期間 令和3年8月2日 (月) ~ 8月27日 (金)

開催方法 動画による審査

審査委員 大久保邦彦 (野々市市教育委員会 教育長)

喜多 由紀 (石川県河北郡市校長会 かほく市立大海小学校 校長)

撫子 正 (白山市PTA連合会 副会長)

清水絵里奈 (石川県教育委員会金沢教育事務所 指導主事)

宮崎 禮子 (石川県青少年育成アドバイザー協会 会長)

発表者 (17名)

タイトル	中学校名	学年	氏名
これからの情報社会に向けて	白山市立北辰中学校	3	江川 友彩
未来を生き抜く力	白山市立北辰中学校	3	山下 果歩
障がいのある人々	野々市市立野々市中学校	3	満田 弥音
愛すべき「普通」	内灘町立内灘中学校	3	百万 花梨
ご飯はおいしい	白山市立美川中学校	3	川畑 凜
「どうして自分だけ」と思っている人へ	白山市立美川中学校	3	山本 華加
人を傷つける言葉	白山市立松任中学校	3	高森 奏楽
本当の自分	白山市立北星中学校	3	喜多岡 佑唯
普通とはかけがえのないもの	白山市立北星中学校	3	北田 菜々
ボランティア	白山市立光野中学校	3	道下 怜愛
不完全な私	白山市立鳥越中学校	3	山本 結花
嫌いな人	野々市市立布水中中学校	3	上出 凜
健康と共に	野々市市立布水中中学校	3	間口 万次郎
「冗談」とごまかさないで	かほく市立宇ノ気中学校	3	後藤 紫咲
主張できる社会へ	かほく市立高松中学校	3	寺田 謡
障がい者ってどんな人?	内灘町立内灘中学校	3	河口 未来
友達	津幡町立津幡南中学校	3	坂田 結菜

(4) 能登地区大会（七尾市、羽咋市、輪島市、珠洲市、羽咋郡、鹿島郡、鳳珠郡）

「第53回全能登私の主張発表大会」

主催 第53回全能登私の主張発表大会実行委員会、七尾市教育委員会

共催 石川県健民運動推進本部

日時 令和3年8月18日（水） 9：30～

会場 田鶴浜地区コミュニティセンター ホール

審査委員 松浦 顕雄（全国高等学校文化連盟弁論部 常任理事）

宮下 慶子（石川県教育委員会中能登教育事務所指導課 課長）

荒巻 幸子（七尾市小中学校校長会 副会長）

辻口 正恵（七尾市中学校文化連盟 会長）

曾山 智浩（中能登町立中能登中学校 校長）

山原 真吾（七尾市教育委員会学校教育課 課長）

発表者（12名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
その一言で	七尾市立七尾東部中学校	3	黒澤 琴乃
言葉と責任	七尾市立能登香島中学校	3	林 瑞樹
祖父と私	七尾市立七尾中学校	3	小玉 かいり
今の社会を改めて考えてみて	輪島市立東陽中学校	2	川原 史衣
胸をはって	七尾市立中島中学校	2	久木 愛心
私の夢	輪島市立門前中学校	1	細川 暖
正しい情報が行き渡る世の中に	輪島市立東陽中学校	2	中村 紗綾
男でも、女でも	中能登町立中能登中学校	2	森正 璃音
好きなこと	七尾市立七尾中学校	3	長尾 優愛
実現するには	七尾市立中島中学校	3	坂上 晏寿
権利を守る権利	七尾市立七尾東部中学校	3	岩崎 瑞生
今、私たちにできること	中能登町立中能登中学校	3	高島 大空

認め合うことの大切さ

岐阜県 養老町立高田中学校 三年 細川 士禾

みなさん、もしあなたが、片腕のない人を見かけたら、どうしますか。声をかけますか。それとも、かけませんか。もし、あなたがお子さんと一緒にいるときならどうですか。「見ちゃだめだよ。」そんな声をかけますか。僕の妹には、生まれつき片腕がありません。そのことで、妹はたくさん辛い思いをしてきました。

―「あの子、手がないよ。」

今年の春、妹がある女の子から言われた一言です。妹は、どうしていいか分からないと、戸惑いと悲しみの表情を浮かべ、僕たち家族の前でわんわんと泣いていました。その姿は今でも僕の目に焼き付いています。それを見た母も、本当に苦しそうでした。まるで何もしてあげられない自分を責めるかのように、ただ泣いていました。そのときのことを思うと、胸がぎゅゅと締め付けられます。ただ、みなさんに知ってほしいことは、妹は、このような経験を何度もしてきたということです。

そうした中、僕は自然と考えるようになっていました。もし、自分が、逆の立場だったらどうするのだろうか。妹と同じように、片腕がない人がいたら、足がない人がいたら…、僕はどうするのだろうか。

きっと、「見てしまふ」と思います。なぜでしょうか。答えは簡単です。「自分と違うから」です。時に、「違う」ことは、問題を引き起こす原因にもなり得ます。しかし、「違う」と認識すること、これは、差別なのでしょうか。そもそも今年の春、妹の手がないと言った女の子。彼女に、相手を苦しめようとする意志はあったのでしょうか。きっと答えは、「NO」です。

僕は思います！僕たちはいつからか、「差別をしないこと」「何もしないこと」、ひいては、「目を背けること」だと、大きな勘違いをしているのではないかと。冒頭で話した、「見ちゃダメだよ」という発言も、このような勘違いから生まれた言葉じゃないでしょうか。

違いを認識し、見て見ぬふりをする事、そして、何もしようとしなくていいこと、これこそが、大きな問題だと、僕は思うのです。なぜなら、

僕たち人間は、違いを知るからこそ、その先のことを考えることができるはずだからです。

それから僕は、妹にかける言葉が変わりました。

「見られるのは当たり前だよ。だってさ、自分と違うんだから。」聞いた妹は、少しきよんととして、僕の顔を見つめていました。

僕も妹も母も、辛い経験を多くしてきましたが、考え方一つで、こんなに大きく傷つくことはなかったのかもしれない。相手は違いを認識しただけ。その先が何よりも大事です。僕たちも、もしかしたら、スタートラインに立っていなかったのかもしれない。

妹のおかげで、僕は大切なことに気付けたような気がします。差別とは、考えることをやめ、相手から目を背けることなのです。ですから、「見ちゃだめだよ。」に代表されるような言葉は、一見相手を思いやっているようにも見えますが、考える機会をただ奪うことにもつながりかねない、上辺だけの言葉なのです。ですから、僕たちは、まず、その人らしさを認め、違いを受け入れ、その上で、その人にとってどんな行動や考え方が必要なのかを考え、見つけ出していくことが、何よりも大切なのです。

妹がいてくれたからこそ、僕は目を背けず、考えることができました。

妹がいてくれたからこそ、僕は相手の気持ちを考え、行動することができました。

今の僕があるのは、まぎれもなく妹のおかげです。本当にありがとうございます。僕は、これからも、妹が、そして、全ての人が、心から笑っていただけるように、目を背けず考え続けます。その先に、差別のない社会があると信じて。

---

---

## 石川県健民運動推進本部

〒920-8580 石川県金沢市鞍月1丁目1番地  
石川県県民文化スポーツ部県民交流課内

TEL 076-225-1365 FAX 076-225-1363

ホームページ [健民運動](#) で検索

メール [kouryu@pref.ishikawa.lg.jp](mailto:kouryu@pref.ishikawa.lg.jp)

---

---

この冊子は再生紙を使用しています